蒙古襲来［中巻］

放たれた矢

山田智彦

角川文庫

蒙古襲来（もうこしゅうらい）

（中巻）

山田智彦（やまだともひこ）

角川文庫　8298

平成三年七月十日　初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話　編集部（〇三）三八一七—八四五一

営業部（〇三）三八一七—八五二一

〒一〇二　振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷　製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

や 21-6

ISBN4-04-138714-0　C0193

蒙古襲来(中巻)

放たれた矢

山田智彦

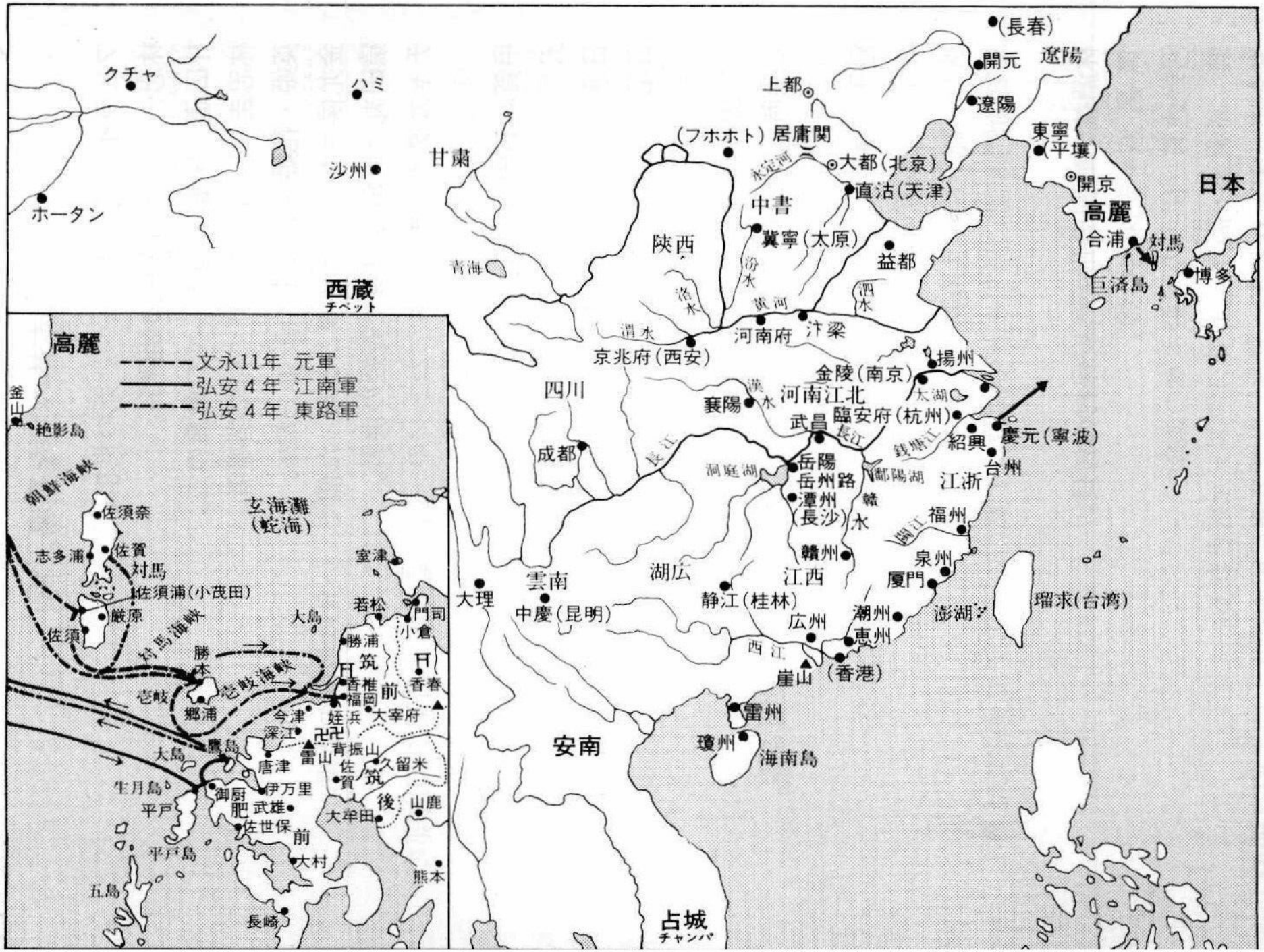
角川文庫 8298

目次

中巻　放たれた矢
出立(しゅったつ)の前夜　七
竜南城　三六
決闘　六九
放浪の始まり　一三
野武士の群れ　一六〇
誘惑　一八二
山賊の頭　二二一
三人の僧　二四一
一騎討ち　二七八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

救出部隊　三〇八
新しい仲間　三四四
草原の彼方（かなた）　三七八
帰国　四〇七
立正安国論（りっしょうあんこくろん）　四三六


(長春)
開元
遼陽
上都
遼陽
東寧
(平壤)
開京
日本
高麗
合浦
対馬
巨済島
博多
(フホホト)
居庸関
大都(北京)
永定河
直沽(天津)
中書
冀寧(太原)
陝西
益都
汾水
洛水
黄河
泗水
河南府
汴梁
渭水
京兆府(西安)
揚州
金陵(南京)
太湖
四川
襄陽
漢水
河南江北
臨安府(杭州)
武昌
長江
慶元(寧波)
紹興
成都
長江
錢塘江
台州
洞庭湖
岳陽
岳州路
鄱陽湖
江浙
潭州
(長沙)
赣水
福州
閩江
赣州
泉州
湖広
江西
厦門
大理
雲南
中慶(昆明)
静江(桂林)
澎湖
瑠求(台湾)
広州
潮州
惠州
西江
崖山
(香港)
雷州
瓊州
海南島
安南
占城
チャンパ
クチャ
ハミ
沙州
甘粛
ホータン
青海
西蔵
チベット
高麗
文永11年 元軍
弘安4年 江南軍
弘安4年 東路軍
釜山
絶影島
朝鮮海峡
玄海灘
(蛇海)
佐須奈
志多浦
佐賀
対馬
佐須浦(小茂田)
厳原
佐須
室津
若松
門司
小倉
大島
対馬海峡
勝浦
勝本
壱岐海峡
壱岐
郷浦
香椎
福岡
香春
今津
姪浜
大宰府
深江
鷹島
大島
雷山
背振山
唐津
久留米
生月島
御厨
伊万里
平戸
肥
武雄
佐賀
筑後
山鹿
大牟田
佐世保
前
平戸島
大村
熊本
五島
長崎

〔本巻の主な登場人物〕

フビライ＝第５代ハーン。元の世祖。

林忠一＝対馬幻次郎の朝鮮名。

朴広道（パククワンドー）＝閑麗水道（ハ ニヨス ド）きっての豪勇の主。

林忠圭＝巨済（コ ジエドー）島の漁師で村の指導者。

英姫・花姫＝林忠圭の長女、次女。

金允侯（キムユンフ）＝かつて南海城（ナムヘ ソン）と名乗った僧で、いまは救国の将軍。

猿田丸＝巨済島出身で花姫の供者。

チャガタイ＝チンギス・ハーンの一族。竜南坊と名乗り幻次郎の味方となる。

甲賀坊石円＝修験道の元山伏。

五月（さつき）＝石円の一人娘で、幻次郎の許婚者。

日蓮＝蒙古襲来を予言する。

日昭＝日蓮の弟子。

相良三郎通永（さがら みちなが）＝北条時頼の家来。

十六郎＝通永の郎党。

北条時頼＝鎌倉幕府の第５代執権。のち出家して最明寺殿。

竜江（りゅうこう）＝宋よりの渡来僧。蘭渓道隆の弟子。

霞子・直実＝幻次郎に人買いから助けられた娘。

徳子＝九条家の一族の姫。

秋乃＝徳子に仕える女中。

徳右衛門＝徳之島生まれの海賊。甲賀坊の元弟子で徳之坊と称した。

林淵益（イムヨンイク）＝韓国忠州郊外安保村の村長。

黄昌淑（フアンチヤンシク）＝安保村の娘。

河野通有（みちあり）＝伊予の河野水軍の頭領。

倎（チヨン）＝高麗王・高宗（コーシヨン）の子で24代国王元宗となる。

李全忠＝宋より対馬に渡来した学者兼武術の達人。対馬幻次郎の師。

中巻　放たれた矢

出立の前夜

林忠一は語った。

彼の静かな声を、集まった人々は聞き逃すまいとしていた。

話を終えると、一同は唸ったり、手を打ったり、膝を叩いたりした。

「じゃが、林家の墓前に、奪った野太刀をそなえたのは、いかなるわけかのう」

質問が飛んだ。

「威しでござる。この土地で林家を侮るととんだことになると無言で教えたつもりでございます」

答えると、

「なるほど」

「それはよいことをして下された」

「広道(クワンドー)めも、それを知って逐電したとは莫迦(ばか)ではないのう」
口々に意見が出てきた。
「したが、よう黙って、そのまま逃げてくれたものよのう」
と一人が言った。
「おおかた、忠一殿が放った殺気に打たれたのであろう。朴広道(パククワンドー)が歴戦の勇士たる証拠よ。あっぱれな男じゃ」
さすがに、林忠圭はそのあたりの機微を見抜いた。
「それがしも、いままでに、あのような強者(つわもの)には出会うたことがないような気がいたします。いずれは雌雄を決せねばならぬ日がくるやも知れません。が、いまは蒙古(もうこ)の兵が攻め寄せると聞いております。内輪同士で争う時ではありませぬ」
「よう言われた。まこと、その通りじゃ」
と古老は頷(うなず)いた。
「そこで、お願いがございます。朴広道との間も、このまますむとは思われませぬ。ことが大きくならぬうちに、蒙古軍を迎えうつ城があると聞く、忠武まで行かせて下され」
と忠一は頼んだ。
「ほう、忠武にか？　あの城にはわが林家の一族も大勢行っておる。だが、行くのはいましばらく待たれい。いずれまたすぐに蒙古が攻め込んでくる。その時こそは」
と忠圭は答えた。

古老はそれまでに、娘の一人をこの若者に押しつけてしまおうと思った。そうすれば、林家の婿として正式に出陣出来る。

が、蒙古軍の来襲は意外に早く、一か月が過ぎぬうちに現実のものとなった。

蒙古軍来襲の知らせは、野を越え、山や田や川を越えて伝えられてきた。

風の便りなどという優雅なものではなく、疾風怒濤（しっぷうどとう）の勢いで高麗王国の山野を駈（か）けめぐった。

この知らせは東南の果ての地、巨済島（コジェドー）の漁村にまで届いた。

六次にもわたる高麗遠征のうち、蒙古軍がこのあたりまで姿を見せたのは四回である。もっとも六回という数も、後になって歴史家が整理した数であって、庶民の感覚としては、いつ蒙古軍が攻め込んでくるかもしれぬ恐怖にさらされた十数年であった。

歴史的にみると、第六次の高麗侵略だけを取り上げても、前後四回、六年間もの長きにわたった。だが、さすがの侵攻も、この時期にいたって、ほぼ終わりに近付いていた。

とはいえ、攻める者も攻められる者も、自分たちの血と汗にまみれた行為が、いったいいつ終わりをとげるのかを知らなかった。攻められれば攻め返し、攻め返されれば、また攻める。夜を日に継いで繰り返される攻防戦に、はたして終わりが訪れるのか、誰にもわからなかったのである。

いったん戦さがはじまり、城門が鎖（とざ）され、城が包囲されてしまうと、どうしても長期戦になる。攻め手が引かぬ限り、守り抜かねばならないからで、高麗兵たちのねばり強さが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

各地で発揮された。そのため、しばらく取り囲んでいて、容易に陥ちぬと判断すると、蒙古兵団は次の獲物を求めて移動した。

もっとも、忠武にある竜南城さえ陥ちなければ、この地域一帯は安泰であった。何故なら、ここには巨済島をはじめ、閑山島、弥勒島、北珍島、上島、下島、蓮花島などがひしめいていた。いわゆる多島海で、その外に名もない無人島が二十や三十はあったのである。海を恐れ、舟を持たない蒙古兵は島への進撃をあきらめている。合浦（現馬山）から陸伝いに忠武まで攻め込み、竜南城で阻止されると、もはや先へは進めなかった。

もし、竜南城が陥ちれば、事態は大いに変わる。隠してあった舟を見つけて、捕虜にした漁師たちに漕がせれば、容易に島へ渡れるだろう。一つの島にさえ渡れれば、あとは簡単である。同じ方法で次々と別の島へ移動して、掠奪に熱中すればよいのだ。

だから、どうあっても竜南城で敵を防がなければならない。そこから先へは、一兵たりとも入れるわけにはいかなかった。

蒙古軍襲来の噂がひろまると、近在の村々や集落は一度に湧き返った。腕に覚えのある漁師や農民たちが、それぞれに得意の武器を手にして、続々と竜南城を目指した。あくまでも城を守り抜くために、彼等は行くのである。

この猛者たちの群れの中に、あの林家の客人であった若者の姿も交じっていた。

村の危機、海島に住む大勢の人々の危機が、刻々とせまりつつあった。

竜南城を守る主将は、かつて中央で名を上げた金允侯将軍である。蒙古の将サリタイを

弓で射殺した若い僧で、もとの名は南海城と呼ばれていた。

その後、武将となって名を馳せたが、江華島内での軍閥たちの派閥争いに嫌気がさして野に下った。もともと僧として名もない寺にいた男である。栄達の美酒や財産にはじめからこだわらなかった。貴人たちの心のうちを見るにつけ、そのおぞましさに苛立ちを覚えて、首都を出た。

直接の原因は、半島のほぼ中心部にあった重要な城、忠州城の守りをまかされ、彼なりの方法で守り通したことにあった。

エグのひきいる蒙古軍は、忠州城を取り囲み、七十日間も攻防戦を繰り返して、ついに陥とせず、諦めて立ち去った。

通常、高麗の城を守るのは二つの軍隊である。一つは両班と呼ばれている貴族階級からなる両班別抄軍で、軍事訓練を受けたいわゆる正規軍であり、もう一つは貴族以外の雑多な人たちからなる、その名も奴軍雑類別抄軍と呼ばれた。単に雑類とも雑色ともいわれている集団で、ここに集められた者たちは戦さでもなければ、剣や弓矢を握ったことのない連中だ。

ところが、いざ戦闘に突入すると、どこの城砦でも印判で押したように同じ現象があらわれた。

まだ戦いの行方がわからぬうちから両班軍が浮き足だち、敗勢が少しでも強まると、われ勝ちに抜け道から逃げ出してしまう。第一線に出て戦うのは、きまって雑軍の方なのだ。

彼等は逃げ出せば、味方の両班軍に斬られる。どうせ、生きる道がないのならと覚悟を決めて蒙古軍と激突した。それだけに強かった。

蒙古軍が諦めて立ち去ると、難を逃れていた両班軍がわがもの顔に引き揚げてくる。これではたまらないと誰もが思う。

物でも無くなれば、明らかに蒙古軍の掠奪とわかっていても、雑色たちのせいにされる。なかには鞭打たれる者まで出てくる。

これは高麗時代の身分制度が、天竺のカーストにも似て、想像以上に厳格であったのを物語っている。

両班の家に生まれた者は永久に両班だ。奴婢は何代をへても奴婢である。両親のいずれかが奴婢であれば、その子は奴婢になる。それを証明するのが、先祖代々伝わってきた戸籍簿であった。

金允侯が忠州城でおこなったのは、まさに画期的な、前代未聞といってもよい事柄であった。彼は、城の書庫から持ち出された戸籍の山に火を放ったのだ。この書類が灰になれば、両班と奴婢の区別はなくなる。

戸籍によって縛りつけられていた人たちは色めきたった。

両班階級の人たちはもちろん、雑類に属している者たちも唖然とした。

「よいか皆の者、よく見よ。これで貴賤のへだたりは消えて灰となった。その方たちは両班でも奴婢でもない。一個の人間だ！」

金允侯は声を張り上げた。

「まもなく、戦さがはじまる。わしの命令通り、心を一つにして闘え！　よいな、わしがよく奮戦したと認めた者にのみ、改めて両班の証明を与える。闘わぬやつは犬にでも食われろ！」

いまや、三十代の半ばになった歴戦の偉丈夫は、言い終わるや足音高く立ち去った。その両肩が巌のように大きく見えた。

城内に集まってきた人々は、驚きよりも恐怖にかられた。もはや、戦うほかはなかった。とくに、代々両班として、その権力をほしいままにしてきた人々は怖れおののいた。子や孫の代まで、奴婢に落ちる恐さを、彼等は知り抜いていたのである。

蒙古兵たちが姿を見せると、老若を問わず、すべての男という男が、武器を取って立ち上がった。

「えい、えい、おーっ！」

日に何度も、城のあちこちで威勢のよい雄叫びがあがった。

金允侯の作戦は成功した。

以後、彼はどの城の守りを任されても、戸籍簿を焼くことからはじめた。内部の気持を引き締め、心を一つに固めてから蒙古軍に当たった。

だが、蒙古軍が退却し、城が守り通され、勝利がはっきりしてくると、彼の強硬策は多くの批難を浴びた。

これらの批難は執拗な声となり矢となって、背後から彼を射た。
江華島に凱旋してからも、軍閥同士の争いの材料にさえなった。この国の身分制度の根強さはすさまじい。とうてい彼一人で立ち向かえるものではなかった。
ある日、金允侯は人知れず江華島を抜け出した。
そして、たちまち行方知れずとなった。
何か月かが過ぎさり、彼は南の果ての島々に姿をあらわした。
漁民や農民が中心となって生活しているこれらの島々には、村の長や古老たちはいても、中心部のような身分制度がなかった。第一、両班のもとになる大地主がいない。土地は狭隘で耕す所とて少なく、人々の生活を支えているのは海の幸である。力を持っているのは網元や船主たちで、彼等が集落の長や古老を兼ねて、まとめ役になっていた。
乞われて、金允侯は蒙古軍の襲来時に限り、海辺の城を預ることになった。
蒙古襲来の知らせが届くや、人々は続々と忠武の竜南城に集まってきた。
当然、城を守る男たちが主体で、老人や女子供は家に残った。
巨済島の村々では、一家に一人の割で城へ向かった。残る者たちは万一にそなえて村に残り、畑を耕したり、海へ出て城内の分までも食糧の確保をしなければならない。
もし、城が陥ちるようなことがあれば、事は重大だ。残る者たちは防戦しながら、女子供や年老いた者たちを安全な別の島へ移動させる。だから、残る者とて気が気ではない。気骨が折れる。

が、何といっても、城は防衛線である。強い者たちに出向いて貰って、防いでもらわねばならぬ。

このため、兄弟が三人いれば、もっとも豪勇な者が選ばれた。兄よりも弟の方が体も頑健で強い弓が引ければ、弟が出た。五人、六人、七人の兄弟ならば、二人ないし三人が申し合わせて城へ向かった。

林家を代表して、林忠一が行くことになった。誰が見ても、順当な選出である。老いた忠圭夫婦と娘二人が残る。

もし、忠一が林家の養子か婿であれば、当然の選択といってもよい。だが、忠一はそのどちらでもなかった。助けられて世話になっていただけの厄介者だ。もっとも、面倒なことに必要以上に気に入られて名まで付けてもらった。二人いる娘のどちらにも好意を寄せられている。

「わたくしも、お城へおともいたします。いっしょに連れて行って下さいませ」

と言い張ったのは妹の花姫の方である。

それを聞くと、姉は顔色を変えた。

「わたくしは、お城へおともは出来ませぬ。その代わり、いつまでもお帰りをお待ちしておりまする。どうぞ、待てとひとこと、お言いつけになって下さいませ」

英姫は頬（ほお）を赤らめながらも、そう訴えた。

必死の面持（おもも）ちであるのは、妹も姉も変わりなく、若者に寄せた思いの深さが感じられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com